2025年6月5日
ショートショート実行委員会
ショートショート アジア実行委員会

＜イベントレポート＞

米国アカデミー賞公認アジア最大級の国際短編映画祭 ショートショートフィルムフェスティバル　＆　アジア 2025

業界屈指のホラー好きで知られる生駒里奈さんと はやせやすひろさん（都市ボーイズ）が登壇 「恐怖と悦楽の境界線！上映＆トークイベント」 生駒さんが思わず泣いてしまった作品は！？ はやせさんは厳選の “呪物”やストーカー着用のスニーカー披露

米国アカデミー賞公認、アジア最大級の国際短編映画祭ショートショート フィルムフェスティバル & アジア（SSFF & ASIA)2025は、映画、連続ドラマ、コミック、小説など、多岐にわたるジャンルの創作活動をサポートするクリエイターエージェンシー株式会社CRG（Creative Guardian）と共に、映画祭史上初となる「ホラー＆サスペンスカテゴリー」を新設。新設を記念し、ホラー好きで知られる俳優の生駒里奈さんと、人気YouTuber都市ボーイズのはやせやすひろさんを特別ゲストにお招きした『SSFF & ASIA 2025恐怖と悦楽の境界線！上映＆トークイベント』を5月30日（金）に表参道ヒルズスペースオーにて開催いたしました。

SSFF & ASIA 2025 ホラー＆サスペンスカテゴリーの中でも、独自の世界観を持ち、物語にひきこむ中毒性、最も震える怪異的な怖さがある作品に贈られる「最震賞supported by CRG」に続く最終ノミネート11作品の中から、当日は『茄子の丑』（監督：Chavo）、『撮影/鏑木真一』（監督：仲里依紗）、『ABYSS』（監督：野上鉄晃 ）、『Twitter』（監督：中村好伸）の4作品がファイナリストとして上映、紹介されました。

また、トークセッションでは、都市ボーイズのはやせやすひろさん厳選の呪物を持参いただき、業界屈指のホラー好きで知られる生駒里奈さんと、ホラー&サスペンスの短編映画の魅力を語り合いました。

左より、CRG福本哲生氏、都市ボーイズはやせやすひろ氏、Chavo監督、中村好伸監督、野上鉄晃監督、生駒里奈氏、CRG四宮隆史氏

自己紹介からスタートしたトークでは、はやせさんがどうして呪物収集家になったかを説明。「国内外で様々な取材をしている中で、ミャンマーで、人を呪い殺すという首飾りを見つけたんです」と話し出すと会場内は一気にホラーな空気に。「呪物と接していると、それ自体がかわいそうだなと思うようになってきたんですよね。元々は求められて作られたり、使われているので、使い終わったらポイッて捨てられるっていうのが、なんだか学生時代に友達がいなかった自分と照らし合わせちゃって。じゃあこの子らを全部家に呼んでかわいがってあげようっていうところから始まったのがきっかけですね。」 と収集のきっかけを話し、 「（呪物に）挨拶も朝晩します。家族のように」と話し、会場からの笑いも誘いました。

今回、「最震賞」のファイナリストとして当日発表され、上映されたのは『茄子の丑』（　Oxplant ）、『ABYSS』、『撮影/鏑木真一』（KABURAGI）、『Twitter』の4作品。
「最震賞」をサポートするクリエイターエージェンシー、株式会社　CRG代表の四宮隆史氏、同じくCRGでハイパーエージェントとしてクリエイターや俳優をサポートする福本哲生氏が　MCとなり、生駒さん、はやせさんと共に、
各作品の監督と制作背景や感想を語りました。

『茄子の丑』（ Oxplant ）
生と死の境界線の間で、その人が見る世界を表現

本作がイチオシだったという福本さんは「ラストへの持って行き方が秀逸だった。映画やドラマを見る時は、画面の絵の色味を結構気にしています。この作品は、独特なカラーといいますか、コントラストも非常に素晴らしくて、世界観に入ることができました。音もすごい大事にされているという印象があります。冒頭の時計。ラストのエンドロール。音がすごく丁寧に使われていて、エンドロールでクレジットが出るときにちゃんと秒針の音に合わせられていたので、最後まで丁寧に作られているなと感心しました。」と感想を述べました。

続いて、作品のアイデアや作られた背景について問われると、 Chavo監督は「一番最初は、海外の映画祭なんかで、作品を観た後に説明文を読みたくなるような作りにしようというところからまず始まりました。ちょっと実験的に、ホラーのジャンルをつけることで、物語のない作品に対してもしっかり最後まで見ることができるようになるんじゃないだろうか、そんな試みで作りました。物語の定義というと、僕の中では、誰かと誰かの間にあるものなのですが、それが一人という状態になったとき、物語は成立しないのでは、と思っているんです。なので、その状態でどれだけ魅せることができるかっていうところ。その 2つをまず考えて、最終的には、僕の友人の2人が当時失調症になってしまったことがあり、その　2人の話を聞いて、その通りにそのまま作ったんです。」と説明しました。

生駒さんも、「すごく面白かったです。私も、この人はやっぱりちょっと心の病を抱えている方なんだな、と最初から感じました。はやせさんもきっとあると思うんですけど、怖い話の中でも、これってよくあるお化けの話じゃなくて、心の病の怖い話なんじゃないか、それをお化けだったりそういうものに例えて話している人の話を怪談ライブとかで披露していただくんですけど。それにちょっと似たような感覚でワクワクして。最後の蛍のシーンも、主人公から見た景色って、怖いのではなく、それが綺麗だったりするのかなとか、想像を掻き立てられてすごく面白かったです。」と語ると、はやせさんも、「僕も実はすごい田舎出身で、一番近くのコンビニまで歩いて一時間半かかるんです。観光客は、や一自然がいいよね、なんて言うんですけど、住んでる人間からすると、実は山とか海というのが大きな壁で、ここから俺はもう出られなくて一生ここで老いていくのかなと思ったりもしたこともありました。好きな映画の言葉で「生きるってのはな、痛いんだよ」って言う言葉があるのですが、その痛さに耐えられないからこの作品のような妄想が始まるのかなと思いました。印象的な秒針も、本当に生きるっていうのが痛い、そこから逃げている。時間が進んでいくっていうのがしんどく感じたり、そんなことを表現しているのかなって。すごく丁寧に細かく、言葉じゃない心理描写が本当に上手だなと思いながら観させていただきました。」とコメントしました。

また、監督は出身地である北九州で撮影した話から、生駒さんは「私も田舎出身なので、ああいう景色を見ていたし、田舎のほうが噂って、　Xよりも早く回ったり、田舎出身あるあるの共感もありました。心理描写がとても突き刺さってくる。ショートムービーだからこそ、短い時間でも心につんとくる作品なのかな」と話しました。

『ABYSS』
純愛？犯罪？自分たちの震源を見るザワザワ感

「ラストの展開と観客に考えさせる余白の部分がすごく良いポイントだと思いました。冒頭から照明が懐中電灯だけだったので、没入できる映像がよかったですね。」福本さんがファイナリスト選定の理由を述べると、
野上監督は「私が別の案件で、長崎からさらに船で 2~3時間の島をロケハンで巡っている時に、嘘か本当かわかんない話をおっちゃん達がすごいしてて。民話、テキスト化されるまではいってないと思うんですけど、
そのお話がとても興味深かったんです。中身は本当はもっと残虐なんですけど、伝承していくために法律で残虐性というものを薄めて伝わってきたような。でも何か自分たちの心の震源を感じさせるような。ザワザワさせるような話を作りたいと思っていました。『 ABYSS』にでてくる矛盾であったり、断絶性だったりって皆さん感じていただけたと思うのですが、そこから滲み出てくる深淵のようなものを醸し出作せていたら良いかなと思っています。」と制作背景を教えてくれました。

「登場人物の好意の矢印が面白かった。遺体には全く何も興味ないけど人には興味があったり、でもここには興味あったりっていうのがみられて面白くて。『 ABYSS』っていうのは穴じゃなくて、あの関係のことをいうのかなと考えたり。うちの妻がストーカーされて 1回家に入られたんですよ、実家に。で、そのままストーカーは靴だけ置いて逃げたことがあるんです。同じ女性を愛した人だしなあと思って。その靴いまだにに履いてて。これもそうなんです。」と驚きのエピソードを披露したはやせさんに、生駒さんは思わず、「それがストーカーの靴？」とおののきながら、「私もなんか純愛だなって思いました。確かに人も殺してるし、同性愛だったり、いろんなテーマがすごくあったんですけど。でも結局根っこにあるのってその愛で結ばれていて、その形が一般的には犯罪になる。でも根っこにあるのは人を守りたい思いだったり。だから起きていることがワンシーンワンシーン怖すぎて、怖さもあるけど、その裏にあるものがすごい深いものなんだなっていうのを感じました。」と感想を語りました。

四宮さんからは、「いろんな解釈が、人それぞれ違うと思います。僕はちょっとひねくれてるから、あの穴に入った 2人はあのまま逃げたんじゃないかなと思ったりしたんです。あとは、若者の生きづらさとか、ままならない現実みたいなものも描かれたのかなとも思っています。」とコメント。
野上監督は、「存在しているようで存在してない若い人たちっていうものを描きたいなと思うところがありました。でも作っているうちに、最終的にはもっと深い心にフォーカスしたんです。」と説明しました。

また、「怪談をよくされている はやせさんにお聞きしたいんですけど、穴に関する物語やエピソードってありそうですね？」と四宮氏が聞き、
はやせさんは、「みんなが知っている桃太郎の話は沖縄だと、穴の奥に鬼がいるって言われていたんですよ。穴に落ちてその先ですごいひどい目に遭う、というものもあれば、穴の先は極楽だったって話もあって。語る人とか語る場所で全く違ったりするので、『 ABYSS』のあの2人も、極楽なのかそれとも地獄なのかどっちか分からないですけど、それも込みで描かれてないのがすごく素晴らしい。面白いなと思いました。」と民話や言い伝えによる物語の魅力にも話がおよびました。

『撮影/鏑木真一』(KABURAGI)
ホラーな一方で撮られる側と撮る側の目線に気づかされる

トークには監督の仲里依紗さんに代わり参加した、プロデューサーの射場好昭さんが登場。最初に、「仲さんは物凄いホラー好き。ミッドサマーが好きでホラーを作りたいっていうお話がありました。しかも秋山さんに一言も喋らせなくていいですかっていうのが、仲さんからの条件だったんです。」と背景を説明。仲さんの大ファンで、この日も作品を観るのを楽しみにしていたという生駒さんは、
「俳優からしたら撮られるストレスってすごくあって。きっと芸能人はこういう気持ちを抱えている。でもカメラマンさんからしたら、撮った相手がまさか死んだらああいう風になるのか！みたいな。自分がいざ撮られた瞬間には、あんな風にビクついて、何なの？ってなる、そういうところをすごく上手に仲さんが表現されていて、私はそれが嬉しかったし、さっき見ているときにはちょっと泣いちゃったんです。どっちからの目線も状況が変わればこうも同じになるんだ、と考えるきっかけにもなる作品でした。」
と感想を述べました。

『Twitter』
3分・ワンシチュエーションで描くエンタテイメント系ホラー

「僕は結構好きなんですよね。ものすごく短尺で、一番ホラーっぽく、わかりやすく。嫌な意味じゃないんだけど、低予算感丸出しで、そこの潔さみたいなのも良かったし。あれどこで撮ったんですか？」四宮さんの質問からスタートした4作品目のレビューでは、「カメラマンの仕事をしてるんですけど、友達に写真スタジオをやってる人がいて、よくそこを借りてワンシチュエーション、低予算で、そこだけを使ってやろうっていう話をしているんです。」と中村監督。表現方法で工夫したこと、この作品を作ろうと思ったきっかけについても質問されると、「大きく分けて 2つあります。僕らカメラマンの仕事をしていて、昔から映画を撮りたいと思ってたんですけど、なかなかハードル高いじゃないですか。やっぱりいつかやりたいなと思った時に、海外ではすごく低予算で短編を長編化するという文化がある。ある監督が、自宅で撮っていて、自分が撮影して奥さんが主演して、それを見た時に、そういう規模でやってもいいんだって圧倒されて。それを見てから始めた 2回目の作品なんでインディーズっぽい低予算でした。
もうひとつは、最近インスタとか SNSの入り口って些細で、どこかわかんないけども、何かをしたら事件に発展して、一番誰もがしてしまいそうな、「いいね」ひとつから入ったら面白いんじゃないかなと思って作りました。」と答えました。

生駒さんは、「すごくホラーだ！って面白かったんです。今のネットの時代になったからこそ起こりうる怖い話。なんで怖くもない投稿がお化けになるんだっていう意外性もありますし。ちょっと時差もあったじゃないですか。あれ、過去の投稿だったはずなのに、なんで今につながるんだみたいな。もしかしてこの投稿者って私だったのかなみたいな。わくわくしながら見ました。ただ、お化け出てくるところ、はい次行きます！はい来ました！はいありがとうございます！っていう気持ちで見ちゃっててどうしようって思っちゃいました(笑)すごく面白かったです。」と評価。
　はやせさんは「ツイッター、僕怖くて使うのが。でも前に、僕が街を熟女と歩いてたっていうのをすごい呟かれて、色んなところで。熟女とうなぎを食べてたあいつ浮気してるじゃん！って全部妻なんですよね。誰が妻を熟女言うとねんって(笑)結構ショックで、そっからちょっと気をつけなきゃなと思ったんですけど。」と会場の笑いを誘い、さらに、「学校の先生の知り合いがいるんですけど、いいねとかリポストしないといじめにあうとか。結構これってSNSがもう身近になりすぎて、それが恐ろしかったりします。さっき生駒さんも仰ったように、過去のことから自分を追い抜いていくっていう、それが恐ろしいことに繋がるっていうワンシチュエーションで考えられていて、見やすくて、あの時間に納められているという、素晴らしい技術だなと思って見させていただきました。」とコメントしました。
　福本さんも、「今回の4作品のノミネート作の中で、唯一お化けっぽい画が出てきた作品。尺も短くして、すごく効果的な演出で魅せられていたなと思いますね。」と感想を述べました。
　四宮さんからは、「中村監督としては長編もちろん作りたいですよね。このテーマを広げて長編を作るとしたらホラー映画ですか。」と質問。「えっとね、これといって考えてない(笑)」と笑いつつ、中村監督は、「ホラーって、僕は2つあると思っていて。「エンターテインメント」か「怪談系」か。「怪談系」はオチがないけど、実際の怖さがあって。「エンターテインメント」は、ギミックとオチがあると思っていて。僕はエンターテインメントの方が好きなので、作るとしたら、そちらよりのホラーを作りたいなと思います。」と答えました。

トークの最後には、はやせさんが持参したレアな呪物が紹介されました。「ある漁師さんが釣りをしていて。漁師さんがちょっとおなか減ったから魚食べようかなって包丁グッと入れたらゴツっとなにか当たって、なんだろうと思って魚の腹開いたらこれが出てきたっていう。古い漁師さんや漁師町の人って、自分が例えば水難事故で亡くなったときに、自分はこういう宗教信仰してるからお葬式はこれでやってくださいね、と首からこういう数珠のようなものを下げるんですよね、こういうふうに。それを多分魚が、遺体の肉ごと食っちゃって、お腹の中にあったところを釣り上げられて、見つかったんだろうなっていう、一品。」とはやせさんが紹介。
　会場の表情は怖い顔になるなか、1700年代の後期に実際に街で配られていた、まじないの本や、インドネシアのバタック文書という首狩り族の呪術書に書かれる話や、実はそれも当時未解明だったウイルスが呪いとされていいたエピソードなど、ホラー好きにはたまらない話で盛り上がりました。

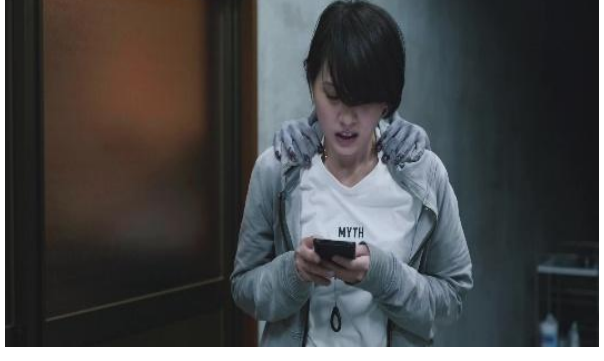
　ファイナリスト4作品の中から、いよいよ、6月1日（水）に開催のアワードセレモニーで「最震賞supported by CRG」の発表が行われます。なお、ファイナリストを含むホラープログラムの作品はオンライングランドシアターで6月11日まで配信いたします。 https://www.shortshorts.org/2025/program/program_cat/horror/

〈最震賞 supported by CRG　ファイナリスト〉

『茄子の丑』（Oxplant ）
監督：Chavo/ JAPAN / Horror /2025/19:00
統合失調症を患う元中央官庁職員の物語。国の中枢で官僚として働いていた男は過度なストレスと家族の不慮の事故が原因で仕事を辞め田舎に戻り家業の百姓をして暮らしている。「一緒にいられる時間も僅かだ。」統合失調症の男の目を通して、生と死の狭間を漂う歪で不安定な世界を映し出す。

『ABYSS』（ABYSS）
監督：野上 鉄晃 (Tekkou Nogami)/日本/ドラマ/2025/14:18
詩（UTA）は殺人を犯してしまった恋人である七（NANA）の後処理をするために武（TAKESHI）と現場にかけつける。3人は死体を運び出し武が幼い頃に見たという底のない穴に死体を捨てるために森に入っていく。

『撮影/鏑木真一』（KABURAGI）
監督：仲 里依紗 (Riisa Naka)/日本/ サスペンス /2024/24:20
週刊誌のカメラマン鏑木は、スキャンダルを暴露し女優を死に追いこんでしまう。スランプに陥り、上司や同僚に再起を誓うが、ある日、追いかけていたアイドルの情報をタレコミする発信元不明のメッセージを受け取る。



『Twitter』（Twitter）
監督：中村 好伸 (Yoshinobu Nakamura) /日本/ ホラー /2025/3:43
「いいね」から始まるSNSホラー。夜、写真スタジオ。帰り支度中にSNSに友達申請が。どんな相手か見ると、微笑ましい投稿がずらり。さらにたまたま同じ飴を持っていたのにも共感して「いいね」を押したが…。

【ショートショート フィルムフェスティバル & アジア 2025 概要】

■映画祭代表：別所 哲也

■開催期間：

４月24日（木）～6月30日（月）オンライン会場

※期間により配信プログラムが異なります。

5月28日（水）オープニングセレモニー

5月29日（木）～6月10日（火）東京会場

6月11日（水）アワードセレモニー

■上映会場：TAKANAWA GATEWAY CITY、表参道ヒルズ スペースオー、
赤坂インターシティコンファレンス、WITH HARAJUKUほか

※会場により、期間、プログラムが異なります。

■チケット：上映会場、オンライン会場ともに有料、一部イベントは無料

販売開始は4月24日（木）14:00～

※オープニングイベントは同日 18:00～

■一般からのお問い合わせ先：info@shortshorts.org

■オフィシャルサイト： **https://www.shortshorts.org/2025**

【株式会社 CRG】 ※2025年のラインナップは4月24日（木）に公開

■主催：ショートショート実行委員会 / ショートショート アジア実行委員会

CRG
CREATIVE GUARDIAN

CRG（Creative Guardian）は、映画、連続ドラマ、コミック、小説など、多岐にわたるジャンルの創作活動をサポートする、クリエイターエージェンシーです。私たちは、才能豊かなクリエイターやアーティストのネットワークを一層拡大し、その才能をフル活用して、
世界中が笑顔と好奇心に満ちあふれるような骨太のエンタテインメント作品を生み出すべく、「聖域なき創造」を追及していきます。

https://crg.jp/company

【ショートショート フィルムフェスティバル & アジア

SHORTSHORTS
FILM FESTIVAL & ASIA

米国俳優協会（SAG）の会員でもある俳優 別所哲也が、米国で出会った「ショートフィルム」を、新しい映像ジャンルとして日本に紹介したいとの想いから1999年にアメリカン・ショート・ショートフィルムフェスティバル創立。2001年には名称を「ショートショートフィルムフェスティバル（SSFF）」とし、2004年に米国アカデミー賞公認映画祭に認定されました。
また同年、アジア発の新しい映像文化の発信・新進若手映像作家の育成を目的とし、同年に「ショートショート フィルムフェスティバル アジア（SSFF ASIA 共催：東京都）」が誕生し、現在は 「SSFF & ASIA」を総称として映画祭を開催しています。
2018年に映画祭が20周年を迎えたことを記念し、グランプリ作品はジョージ・ルーカス監督の名を冠した「ジョージ・ルーカス アワード」となりました。2019年1月には、20周年の記念イベントとして「ショートショートフィルムフェスティバル in ハリウッド」が行われ、また、2019年の映画祭より、ライブアクション部門（インターナショナル、アジアインターナショナル、ジャパンの各カテゴリー）およびノンフィクション部門の各優秀賞4作品が、2022年からはアニメーション部門の優秀賞を含む5作品が、翌年のアカデミー賞短編部門へのノミネート候補とされる権利を獲得しました。SSFF & ASIAは映画祭を通じて引き続き、若きクリエイターを応援してまいります。
【公式ウェブサイト】https://www.shortshorts.org

【本件に関するお問い合わせ先】

ショートショート実行委員会　担当：田中　TEL：03-5474-8201 ／ FAX：03-5474-8202 ／ E-mail：press@shortshorts.org

画像は下記よりダウンロードいただけます
https://drive.google.com/drive/folders/17m-dX9GJEXO9ShLsIc_7Wepi-8yQKtId?usp=sharing